いのちの荘厳
仏華

浄土真宗本願寺派 東林寺住職
華道家元池坊 華道教授
弓場洋子

はじめに

お仏壇やお寺の本堂において尊前をお飾りすることを荘厳（しょうごん）といい、その基本は香・華・灯の三つです。香・華・灯をお供（そな）えすることは、仏さまのお徳を讃えご恩に感謝する気持ちを表します。しかし荘厳されたその花（華）は仏さまではなく、私の方を向いています。これは、荘厳がただの装飾ではなく、私に向けてはたらいてくださっている仏さまの救いのお心を表しているからです。

また荘厳の美しさは、仏さまの世界であるお浄土の素晴らしさが、私たちにも伝わるよう表現されているといわれています。ですから荘厳を整えることは、お浄土に思いを寄せることによって、その世界に生まれさせたいと願う仏さまのお慈悲を味わうことになります。

この三つのお供えのなかでも、工夫を凝らす余地があり、また気持ちを込めて形づくることができるのが、華（仏華）です。それは裏を返せば、お供えする人が自分で作りあげなければならないということでもあります。仏華のかたちに正解・不正解はありませんが、お浄土のありさまに思いをいたし、お参りされる人にとっても心地良い華をお供えしたいものです。

花は、時期や地域、気候風土によって、手に入るものが違います。また、同じ種類の植物であっても、同じ枝、同じ葉、同じ花は二つとありません。そんないのちあるお供えである仏華について、浄土真宗本願寺派の住職であり、華道家元池坊（いけのぼう）の華道教授としてもご活躍されている弓場洋子氏に、誰もが美しいと感じられるかたちの一つをご提案いただきました。

バランスを見ながら役枝（やくえだ）を立てていくことは、はじめは難しく思われるかもしれません。しかし大切なのは、荘厳としての仏華を自分で作りあげることなのです。

ご本尊（仏さま）が安置されたお仏壇は、私たちの心の依りどころとなる場所ですので、いつも美しく保つよう心がけましょう。日々、心をこめて荘厳を整えることは、報恩謝徳のいとなみの一つです。本書がそんないとなみの一助となり、お念仏を喜ぶ機縁となることを願います。

本願寺出版社

室町時代の花伝書に、掛軸と三具足の両脇に花を飾った「御成飾（おなりかざり）」が伝わっている。客を迎えるために書院造の床にしつらえられたもので、「座敷飾（ざしきかざり）」ともいわれる。
左の作品は、それに学んだものとして、池坊京都支部 松尾美ね第32回社中展にて制作されたもの（2020年11月22～23日 於 本願寺聞法会館）。

いのちの荘厳 仏華 もくじ

はじめに 2
仏華とは 6

一章 十二カ月の仏華

一月 新年 10
二月 年忌法要 12
三月 春彼岸 14
四月 満中陰 16
五月 降誕会 18
六月 永代経 20
七月 平生 22
八月 盂蘭盆会 24
九月 秋彼岸 26
十月 慶事 28
十一月 報恩講 30
十二月 迎春 32

二章 いけばなの基本

必要な用具 36
込み藁の作り方 38
花材の見方 41
花の下処理 42

column
お仏壇の仏華 34
仏華を立てたあとは養生を 61
「禁花」にご注意 61

いけばなの技 43
切る 43
削る 43
さばく 44
撓める 45
押し撓め 45／菊撓め 46／切り撓め 47／ねじり撓め 48

三章 仏華を立てる

基本の仏華 50
仏華における役枝のはたらきと出所 52
仏華における挿し口と方向 54
立て方 55
真の作り方 55
大葉の作り方 57

著者紹介 62
あとがき 64
使用花材一覧 66

＊本書で使用している花瓶（かひん）は、寺院用のものはすべて七寸で、込（こ）み藁（わら）（38頁参照）を使って仏華を立てています。込み藁以外にも花瓶の内径に合わせた竹筒やY字型の花配（はなくば）り（木配り）を使用する方法もあります。立つ姿が表せるのであれば、花留めは使いやすいもので構いません。お内仏（仏壇）用の花立は、四・五寸です。

仏華とは

仏華（仏前供華）の歴史は古く、千数百年におよびます。六世紀半ばの仏教伝来のころより、仏前に花を手向けるという行為が行われていました。仏前供華が時代の変遷とともに、現代のようにさまざまな場所での装花となり、日本特有の「いけばな」を誕生させるに至ったことは、ご周知の通りです。

私がいざ仏華を立てるとなったとき、拠り処となるのは仏前供華が発展して形となった「立花」の立て方であると考えました。これは、経谷芳隆氏が著述された『本願寺風物誌』（絶版）に、仏前供華について「室町時代から発生した立花の形式が基本となっているようで、立花は供華として最も発達した形式と言うべきであろう」と書かれていたからです。

立花の役枝については後述しますが、極楽浄土の荘厳について、『仏説阿弥陀経』には、

「青色青光・黄色黄光・赤色赤光・白色白光（大輪の蓮華の花々がそれぞれの個性を生き生きと光り輝かせ、それでいてすべてが融和しすばらしく美しい世界である）」と書かれています。このことから私たちが荘厳する仏華も、一枝一葉それぞれの個性を活かしたものを立てなければならないと思います。

仏華の形についても、真ん中の一番高い枝を中心に、左右非対称に立てていくこととします。中心の高い枝より下、中段より左へ流れる枝、同じく中段より右へ柄香炉のように受ける枝、下段より左へ短く出る枝、そして下段より右へ抱きとるように長く出る枝、どれ一つとっても同じものはありません。言い換えれば、同じ個性や同じいのちはないということです。

「信は荘厳より生ず」といわれるように、荘厳はとても大切なものです。その荘厳のなかでも、時季のうつろいやいのちのはかなさを感じることができるのは仏華だけ、まさに「いのちの荘厳」です。ですから、整然と荘厳されたほかの仏具と同様に、心をこめて整えましょう。

一章

十二カ月の仏華

一年の法要行事に合わせて、
入手しやすい四季折々の花材で
十二カ月の仏華を立てました。
立花の姿を参考にしながら、
草木の自然な性状を活かし、
極力針金は使わずに立てています。
また、内陣に用いた花材で、
お内仏（仏壇）用の華も立てました。

「三具足」本願寺 聞法会館にて

花材

- 朝鮮槇
- 雪柳
- ナナカマド（紅葉）
- 菊（白）
- ドラセナ
- りんどう（青）
- ヒペリカム
- スプレー菊（黄）
- 鳴子ゆり

一月◈新年

阿弥陀仏のお姿を「真」に託してすっくとまっすぐに立てる

新しい年の始まりです。一月は寺院の行事として、教化団体等の新年会、年始会が開催されることが多いと思います。私のお寺でも、多くのご門徒さんが参拝してくださいます。ですから、荘厳、特に仏華にはとても気を遣います。本堂に入ってすぐ目に飛び込んでくるのは、美しく荘厳された仏華なのです。

以前にある女性のご門徒さんから、「住職の立てる仏華は、真ん中に仏さまが立っておられるみたいですね」と言われたことがあります。大変嬉しく思い、「真ん中に立っている枝は真（しん）といって、南無阿弥陀仏（なもあみだぶつ）の枝なのですよ」と答えました。私たちの仏さまに向き合う姿勢が曲がっていてはいけない――改めてそう感じさせてくれる、まっすぐな松（枝若松（えだわかまつ））を真にしています。

この一年、草木のいのちとしっかり向き合い、謙虚でありたいものです。

お内仏の仏華

真の山茱萸が枝振りから陽方（左）になっていますが、正真の水仙でバランスを取っています。水仙など長い葉が付いているものは、葉を効果的に使います。

point

陰（冬）の花のなかで最高の花といわれる水仙を正真（しょうしん）に。寒い時期ですが、春の到来を感じる菜の花など、季節を少し先取りした花材で華やかにします。

花材

- 松
- 水仙
- 山茱萸（さんしゅゆ）
- つげ
- 千両
- 菊（黄）
- 菜の花
- アルストロメリア